

小・中学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

へき地教育

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿

市町村名	学 校 名	氏 名
八 王 子	恩 方 第 一 小 学 校	雛 倉 知 男
青 梅	第 9 小 学 校	小 林 進
青 梅	霞 台 小 学 校	小長谷 典 敬
青 梅	泉 中 学 校	小 倉 正 明
日 の 出	平 井 中 学 校	○ 櫛 嶋 浩 幸
檜 原	檜 原 小 学 校 数 馬 分 校	清 水 千 絵
奥 多 摩	古 里 小 学 校	◎ 山 崎 保 義
奥 多 摩	氷 川 小 学 校	△ 渡 辺 洋 子
奥 多 摩	小 河 内 中 学 校	増 沢 強
三 宅	坪 田 中 学 校	加 藤 一 則

◎ 全体世話人

○ 副世話人

△ 全体記録

担 当

東京都多摩教育事務所西多摩支所 指導主事 高 崎 彰

同 上 横 山 正 彦

目 次

I	研究主題及び主題設定の理由	2
II	主題に迫るための基本的な考え方	4
1	研究のねらい	4
2	仮説検証の視点	5
3	各検証事例との関連	6
III	研究の全体構想	7
IV	研究の内容	8
	検証事例・その1 地域素材を活用し、体験的な学習活動を展開することにより 一人一人が自ら課題をもち、学ぶ力を育てる指導の工夫 ・小学校第2学年生活「わたしのかぞく」	8
	検証事例・その2 身近な素材を活用し、日常の自然現象に関心をもたせる工夫 ・中学校第1学年理科「光と音の世界」	11
	検証事例・その3 地域素材を活用し、児童一人一人が学習課題をもつための指導の工夫 ・小学校第5学年社会「檜原村の産業」	14
	検証事例・その4 作問による課題学習を通して、問題解決の能力を高める指導の工夫 ・中学校第2学年数学「課題学習」	17
	検証事例・その5 スピーチを通して、生徒一人一人が自ら学ぶ力を育てる指導の工夫 ・中学校全学年英語「スピーチ」	20
V	研究のまとめと今後の課題	23
VI	参考文献	24

研究主題 体験的な活動を生かし、児童・生徒一人一人が自ら学ぶ力を育てる指導の工夫

I 主題設定の理由

本研究部会では、西部山間地域や島しょ地域の特性、へき地・小規模校の児童・生徒の実態について共通理解を図った上で、へき地教育の課題を解決するための指導の工夫について研究することにした。

1 地域の特性と児童・生徒の実態

西部山間地域と島しょでは、一部では住宅の開発などが押し進められている地域もあるが、多くの児童・生徒は自然に恵まれた環境の中で育っている。

何世代にもわたりその地域に住んでいる人々も多く、地域と学校との関係は密接であり、協力的でもある。また、豊かな自然環境とともに、伝統的な文化も多く残っているが、児童・生徒がそれらを有効に生かして遊ぶなどの経験は少ない。都市部へ出かけるのに時間がかかり、行動範囲も限られ、多くの人々と触れ合う機会が少ないという状況にある。しかしマスメディアの発達に伴う情報だけは、都市部と同様に入ってくる。

へき地の児童・生徒は、その多くが幼少時より小・中学生時代まで、小さな集団の中で育つ。また、多くの場合は、中学校又は高等学校卒業とともに、進学や就職のために、親元・地域を離れて生活しなければならないという現実がある。

このような環境の中で育っている児童・生徒は、明るく素直で純朴であり、級友とも明るく接し、与えられた課題には真面目に取り組むことができる。しかし、ともすれば人間関係が固定しがちになるため、話し合いの仕方等を学ぶ機会が少なく、表現が限定的になりがちであり、また主体的な学び方が身に付きにくい等の課題がある。

2 体験的な活動を生かし、意欲をもって学ぶ態度を育てる。

今日の児童・生徒には、成長過程における直接体験が不足しているといわれている。自然の中での体験や文化的体験のみならず、社会的役割体験など、さまざまな体験の機会がないまま成長し、そのことがいろいろな問題の背景になっているという指摘がある。

へき地の児童・生徒においても、直接体験の機会が得やすい環境にあるにもかかわらず、同様の課題が存在する。豊かな地域の自然や文化があるにもかかわらず、日常生活や学習活動の中で、直接体験をする機会が少なくなっている。その結果、直接体験をしないで習得される知識の割合が増え、直接体験を経なければ身に付かない能力や態度が育てられにくい状態になっていることは、都市部で育つ児童・生徒との場合と同様である。

したがってへき地の学校でも、児童・生徒の発達段階に合わせ、体験的な活動を重視した学習内容を工夫・改善することが特に重要である。大切なことは、児童・生徒が教室の中で知識として学んだことを、体験を通して深めたり、自分の体験に照らし合わせて「よく分かる」という物事の認識の仕方について学ぶことである。このことによって、単に知識・理解のみを中心とした学習では身に付かない「よく分かる」ことの意味や、学ぶ過程や学んだ結果において成就感や満足感を実感することができる。また、自分にとっての学ぶ意義や必要性をより確かなものとすることができる。さらに、知識や技能を身に付けていくための自分なりの直観力や方法などを体得することもできる。

3 自ら学ぶ力を育て、課題を解決していく能力を育てる。

情報化、国際化、高齢化等の複雑で変化の激しい社会をたくましく生きぬくためには、課題意識を持ち、自ら問題を主体的に解決していく能力が必要である。それは情報を収集・分析し、知識や経験を十分に生かして判断し、問題を解決していく能力である。また困難な課題に対しても、それに粘り強く取り組み、積極的に乗り越えていこうとする意志や耐性などを含むものである。

したがって学校では、生涯学習の基礎を培う役目を担う立場からも、自ら学ぶ力を育て、主体的に課題を追究し、問題を解決していく能力を育てていくことが大切である。そのためには教育活動全体の中に、集団の中で他人との協力や、役割を遂行する体験を積極的に取り入れ、物事を成し遂げる喜びを体験させていくことが大切である。また、幾つかの課題を自分で選択させ、それを最後まで責任を持って解決させていくことも必要である。そうした課題解決への努力の中で、児童・生徒は、自らの課題解決のために、主体的な対応を余儀なくされ、自分の責任において解決の方法を選択し、自らの責任において実行しなければならない。自分で選択した方法に従って処理することから、学習内容に対する臨場感や問題に対する切実感が一層強化される。また、つまずいても、自ら知恵を絞り、忍耐強く取り組むことができるようになる。そして、自ら挑戦し成し遂げた成果に対しては実感の伴った成就感や満足感を得ることができると思われる。

4 地域素材を活用し、へき地・小規模校の特性を生かした指導法を工夫する。

児童・生徒は、地域の一員として育ち、地域社会の形成者としてたくましく成長していくことが望まれている。ここに次世代の担い手としての児童・生徒がよりよく成長して行けるよう援助する教育を地域に根ざしながら作りだしていく必要がある。

したがって学校では、へき地の自然・産業、歴史、文化等の良さを積極的にとらえ、その特性を生かした学習活動の工夫・改善を図ることが大切である。地域素材を教材化し、効果的に活用することによって、学習活動の質的転換を図ることが期待されている。

しかしながら、児童・生徒は地域の持つ良さに気付いていないことも多い。それは地域素材に直接に触れたり、親しんでいないことが原因となっている。児童・生徒に地域の良さに気付かせ、理解を深め、愛情や誇りを育てていくためには、地域教材を有効に活用することが大切である。

また、へき地・小規模校においては、在籍する児童・生徒一人一人の個に応じた指導の工夫が必要である。一人一人へのきめ細かな児童・生徒理解を前提として、教材・教具の工夫や指導形態・指導過程を工夫するなど、各自の学習意欲を育てる指導法の改善が必要である。児童・生徒の興味・関心を高めるなど個に応じた学習活動を進めることによって、児童・生徒が学習の仕方を身に付け、意欲を持って学び、主体的に課題を追究し、問題を解決していく能力を身に付けることができる。

へき地・小規模校の学習活動の工夫・改善を進める上で大切なことは、上述の1をふまえながら、2～4を基盤とした学習活動を展開することである。

以上のような観点から、本部会の研究主題を設定した。

Ⅱ 主題に迫るための基本的な考え方

1 研究のねらい

(1) 主題に迫るための研究のねらい

児童・生徒が急激に変化する社会をたくましく生きていくためには、自ら学ぶ力を育てることが大切であると考えた。本部会では主題に迫るための研究のねらいとして、「興味・関心を高め、課題解決していく態度・能力を育てる」こととした。

では、そうした態度・能力の育成とは、どのような内容を含んだものであろうか。

① 自ら課題を解決しようとする。

へき地の児童・生徒は、与えられた課題に真面目に取り組むことができると言われている。この特性を生かし、自らの課題を明確にし、それを解決していこうとする態度を養うことが必要である。様々な課題に対応し、たくましく生きていくには、学習の仕方を身に付けさせ、それを応用していく能力を養うことが大切である。

② 自ら進んで意欲をもって学習する。

へき地の児童・生徒は人から言われたことは素直に聞くと言われている。この特性を生かして自ら進んで粘り強く意欲的に困難に立ち向かおうとする能力を身に付けさせることが必要である。これからの社会の変化や地域の課題に主体的に対応していくためには、意欲的に学び続けようとする態度を養うことが大切である。

③ 自分の考えや気持ちを進んで表現しようとする。

学習したことがらについて自らの考えや気持ちをしっかりもち、それを適切な言葉や態度で発表したり、人の意見と自分の考えを比べその違いに気付き、さらに自分の考えを深めていこうとする能力を育てる必要がある。

④ 基礎的・基本的な知識や技能を身に付けそれを応用する。

主体的な学習活動を通して、基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、さらに、それを応用する態度を身に付けることが必要である。それが個性的な物の見方・考え方や創造性を育てる基礎となる。

⑤ 全員が共に向上しようとする。

へき地の児童・生徒は、親密な人間関係を保っていると言われている。この特性を生かし、お互いを認め、励まし合い、協調し合う態度を養っておくことが必要である。そうすることで一人一人が学習に積極的に参加するとともに一人では解決できない課題でも全員で力を合わせ、協力し合うことにより解決を可能にすることができるようにする。

(2) 研究の仮説

児童・生徒一人一人が自ら学ぶ力を育てるためには、まず、興味や関心をもたせる教材を選択し、体験的な学習を取り入れることが重要である。このことは、児童・生徒の自ら学ぶ意欲や学習課題の明確化と密接なかかわりを持ち、内発的学習意欲の育成へと発展すると考えられるからである。

また、児童・生徒が主体的に課題を解決したり、成就感の得られる機会や場を設定したりすることも重要である。課題解決をめざす学習の過程において、一人一人が学んだこと・考えたことや意志を他人の考えや意志と対比させる中で、自分の考えを高めたり自分なりのよ

さを発見するとともに、他人の中の異なる意見を尊重したりする態度が育成できると考えた。
以上のような考えから次のような仮説を設定した。

<仮説1> 地域素材や身近な素材を活用し、体験的な学習活動を展開することにより、児童・生徒の興味・関心も増し、自ら進んで学ぼうとする意欲が高まるであろう。

<仮説2> 主体的に課題に取り組む学習活動を工夫し、児童・生徒が自ら課題を解決することにより、成就感が得られ、自ら学ぶ力が養われるであろう。

2 仮説検証の視点

(1) 地域素材や身近な素材を活用した教材の工夫

地域素材や身近な素材を教材化するに当たり、次のような点に配慮することに努める。

- ① 発達段階に即し、興味・関心を誘発する教材を工夫する。
- ② 個に応じた多様な学習課題を解決できるような教材を工夫する。
- ③ 既存の知識や経験が生かせるような教材を工夫する。
- ④ 思考力・判断力・創造力を促す教材を工夫する。
- ⑤ 具体物や視聴覚機材等適切な教材・教具を準備し、有効な活用を図る。

(2) 学習形態の弾力化

学習において、個別学習、グループ学習、一斉学習の三形態を組み合わせることで学習形態を弾力化して、児童・生徒に多様な学習の場を用意するよう工夫する。

- ① 全員に学ばせる基礎的な内容や共通に理解させるべきところは、一斉学習に当て、一人一人の興味・関心に基づいて学習を進めるところは個別学習やグループ学習とする。
- ② 一人一人が個別に獲得した学力をそのままにせず、全体の場で発表し合い、より確かな学力に高めるため、個別（またはグループ）学習のあとに一斉学習を計画する。

例えば、個別学習やグループ学習の後に発表し合う活動を取り入れたたり、一斉学習の後に討論し合い、また一斉学習にもどすなどの授業の展開を工夫する。

- ③ 一斉学習における学習到達点を一人一人診断し、その個人差に応じて個別学習やグループ学習を行うことによって、基礎・基本の徹底を図る。

(3) 生き方を学ぶふれあい学習の場の設定

- ① いろいろな職業経験、人生経験を持った社会人に、児童・生徒を直接、指導してもらう。
- ② 学校外の高い文化に積極的に触れさせる。

(4) 体験的な学習を導く展開

生活科にとどまらず、どの教科においても体験的な学習を重視する。

体験的な学習の計画においては、学校の教育課程を工夫して協力体制を確立するとともに、年間指導計画の中で無理のない範囲で計画する。

① 体験的な学習の形態と特徴

- ・児童・生徒が体全体を使って活動する学習形態にする。
- ・実社会の事実・事象に直接ふれる体験を通して学ぶ学習形態にする。
- ・一つの問題を追求する持続的な活動が展開される学習形態にする。

② 体験の「質」の吟味

- ・児童・生徒の興味から出発する体験－児童・生徒のニーズを大切にし、学びたいという欲求を引き出すような体験にする。
- ・時には壁にぶつかり、困難を感じることでできる体験－“こだわり”と“つまずき”を大切にする。
- ・次々と活動がつながり、構造化できる体験－時間的な見通しが組み立てられるように計画する。

(5) 問題解決的な学習を導く展開

「学ぶ力」を形成するためには、問題解決的な学習が有効な学習方法である。

各教科の年間指導計画を作成する際にいくつか、問題解決的な学習をする単元を選定しておき、そのための準備の時間を確保する。

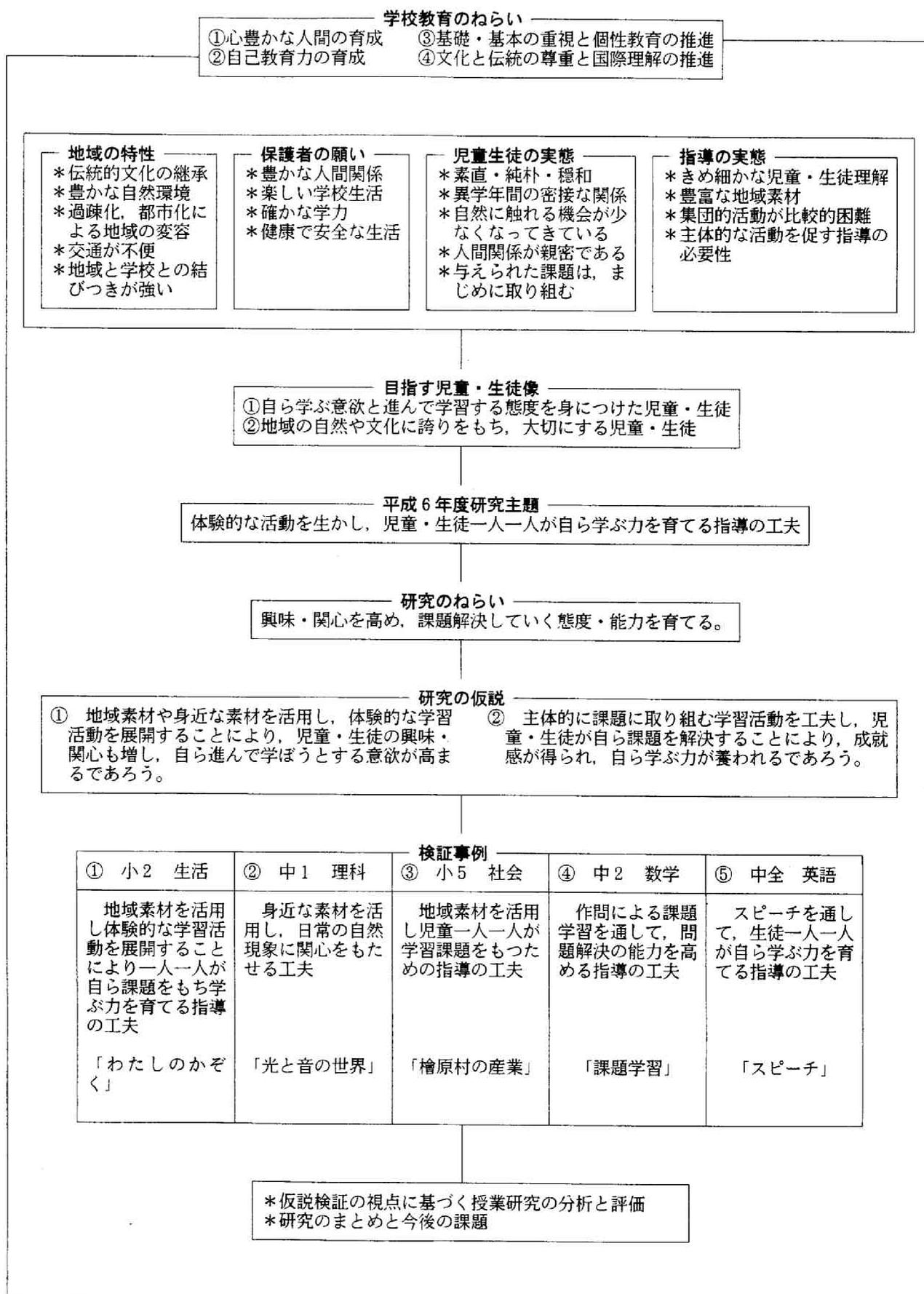
- ① はじめの段階において、児童・生徒から課題についてのイメージを引き出し、それに基づいて思考を導く必要がある。そのため、イメージを喚起する教材を用意したり、児童・生徒がイメージを描く時間を大切にする。
- ② 児童・生徒が事実・事象との対決を通して、自らのイメージを修正・発展することができるようにし、教師はこの事実・事象との対決を根気よく見守り、児童・生徒が試行錯誤を通して解決できるように仕向ける。
 - 解決のプロセスの自覚を高める。
 - ・結果よりもプロセスを大切にしながら、学び方を身に付けさせる。
 - ・学習のプロセスや結果が目に見える活動、能動的な自己活動を事業に取り入れる。
 - ・学習計画を立てさせる。解決過程を記録させる。結果の自己評価や反省をさせる。
 - 考える時間を与える。児童・生徒の意見を受容し、意見を引き出す。
 - 教師が「拡散」と「収束」の二つの思考の方向性を押さえ、タイミングよく導く。
 - ・思考を深める有効な発問を一、二、指導案に位置付ける。
 - ・必要に応じて、基礎的な知識や技術の習得に対しては丁寧に教える。
- ③ 最終のまとめの段階において、児童・生徒が自らのイメージと言葉によって結果をまとめる。そこで自分の考えを再確認したり、集団的思考で自分の考えを補ったり、自分の特徴を知ったりすることが期待される。

3 各検証事例との関連

上記の仮説検証の視点に立ち、各検証事例で追求しようとしたのは以下の点である。

- 事例1 地域素材の活用と体験的な活動により自ら課題をもたせる。
- 事例2 身近な素材の活用と日常の自然現象に関心をもたせる。
- 事例3 地域素材を活用し、一人一人に学習課題をもたせる。
- 事例4 課題学習を通して問題解決能力を高める。
- 事例5 体験的な学習を通し自ら学ぶ力を育てる。

Ⅲ 研究の全体構想



IV 研究の内容

検証事例・その1

地域素材を活用し、体験的な学習活動を展開することにより一人一人が
自ら課題をもち、学ぶ力を育てる指導の工夫
小学校 第2学年 生活

1 単元名 「わたしのかぞく」

2 単元のねらい

- (1) 自分達が生まれてから今までの成長には、家族をはじめ多くの人の支えがあったことがわかる。
- (2) 家族の人に感謝の気持ちをもち、これからも意欲的に生活することができるようにする。

3 単元設定の理由

- (1) 生活科2年においては、家族と共に意欲をもって生活することのできる子供を育てることや、誕生から現在までの自分の成長を振り返ることが求められている。そこで本校の特色を生かして（全員に祖父母がいる）祖父母から自分の生い立ちについて聞く、自分の成長について振り返らせる。また祖父母を単なる老人としてではなく自分と同じ少年時代を過ごし、自分達を愛し、育ててくれている身近な存在として捉えさせる。
そうした活動を通して、身近な人々に対して感謝の気持ちをもてる子どもを育成したいと考え、この単元を設定した。
- (2) 特に配慮したことは、祖父母の生い立ちなどを聞く学習となるので、事前に家族の了解を得たり、電話・手紙等での連携を密にして学習の効果を高めるよう工夫した。
本学級の4人は全員2、3世代が同居しており、祖父母が健在である。今、祖父母と孫との交流を通し、自分と祖父母の生い立ちについて、少しでも多く聞かせておきたいと考える。
- (3) 昨年度、祖父母の生活の様子を聞いてきて「おじいちゃんおばあちゃん物語」という紙芝居を作った。このことによって祖父母にも、かつては自分達と同じ子供時代があったことに気づき、これが祖父母への愛情を一層感じさせることになった。
- (4) 今年度は、それを発展拡充させて
 - ア おじいちゃんおばあちゃんの子供のころ
 - イ お父さんお母さんの生まれたころ
 - ウ 自分の生まれたころ
 - エ 自分が生まれてからの様子など時間の推移をもとにし、家族の支え合いについて、大きな流れの中で捉えさせたいと考えた。
そうした流れの中で、祖父母が果たしてきた役割（子供を生み育て自分の家や郷土の上成木を発展させてきたこと。）についても気付かせ、祖父母、父母という家族があってこそ自分が存在するのだということを感じさせようとした。そしてこの単元での学習を次年度（3年）以降の社会科・郷土学習へと発展させていけるよう配慮した。

4 研究主題との関連

本年度は、昨年「聞いたことをもとにして想像したり調べたりする」活動を更に進めて「祖父母から話を聞いたり、家にある写真などの資料を捜し出し、それをもとにして、さらに自分の知りたいことを調べる。」ことにより今まで分からなかった自分の生い立ちについて多くの人々の支えがあったことが分かるように工夫した。こうした活動が、祖父母への感謝や父母への感謝の気持ちと結び付き、そこから自分の生活に自信をもち、生きる力、学ぶ力が育って来るのではないかと考えた。

5 地域の様子と児童の実態

埼玉県名栗村との境にある本校の学区は成木川が作った狭い谷合に集落が点在している。家族構成も昔ながらの大家族が残っており三世同居が多い。しかし昔の家族形態ではあっても中味はかなり変わってきている。家々には囲炉裏もなくなり家族の結びつきも弱くなってきた。子供たちの生活の中から祖父母の存在の影は薄くなりつつある。

1年生のとき自分たちの祖父母について質問したのに対し知っていたことは余りにもわずかであった。

「歳を知ってる。」「もしかしてお父さんのお父さんお母さんかも。」という程度の反応しかなかった。

その子供たちも順次祖父母についていろいろなことを知るにしたがい、祖父母について尊敬の念も見られるようになり、さらにそれを誇りとするようにもなってきた。また自分が大人になった時は何をしたいかという質問に対しては、「あとをつぐんだ。」「成木に残る。」等の郷土や家族との関わりを意識した答えが返ってきたのには驚かされた。この子供たちなりに自分の生き方についての意識の変化があったようである。

6 指導計画

(1) 「わたしのかぞく」について調べよう。 どんなことを学習するか概略をつかませる。 簡単な質問用紙をつくり、それを使って調べたり写真などを探してきて学習することを知らせる。	(1時間)
(2) 調べたことを表にしよう。 説明をまとめ、紙に書いて貼ったり、写真をコピーしたものを表に貼りつける。 祖父母の生まれたころから自分たちの生い立ちまでを感想も交えて話し合う。	(3時間)
(3) 調べてわかったことを発表しよう。 発表の仕方を考えて、準備をする。 自分の言いたいところをまとめ、わかりやすく発表する工夫をする。 調べたことと自分の考えたことを一人一人発表する。	(3時間)

7 本時の指導

(1) ねらい

- ・自分の生い立ちについて、今回学習した内容を踏まえて発表することができる。
- ・自分の家族に対する気持ちなどを、聞いている人に分かりやすく伝えることができる。
- ・友だちの生い立ちについてよく聞いて、自分の考えをまとめることができる。

(2) 展 開

	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
5 分	・発表の仕方について話し合う。	・前時までの流れを説明。	
30 分	・自分のおじいちゃんおばあちゃんから聞いた話をもとに、調べてきたことを写真や自分の作った年表を使って皆の前で発表する。 ・発表の内容について質問する。 ・家族の人に自分がしてもらったことについて話し合う。	・写真コピー・年表を黒板に順番に掲示する。 ・説明が良く分かるよう要点について質問する。 ・自分の生い立ちには多くの人の支えがあったことを実感させる。	各自用意した ☆写真コピー ☆年表 ☆台紙用 模造紙
10 分	・みんなの発表を聞いたり自分が調べたことについて、感じたり考えたりしたことをまとめる。	・自分の考えをまとめられるよう、個別に指導を行う。	☆「感想文」 プリント

(3) 評 価

- ・ポイントをおさえて分かりやすく発表することができたか。
- ・自分なりの考えをまとめることができたか。

(4) 授業の考察

- ・教師も児童も楽しんで学習することができた。
- ・自分の誕生から現在まで、どんなに家族に愛され、多くの人の助けがあって育ってきたかが分かった。
- ・この学習を通して、祖父母の苦勞を知り、郷土を育ててきた祖父母を誇りに思うようになるとともに、感謝の気持ちをもてるようになった。
- ・自分の製作した年表などが自分の生い立ちを知る上での貴重な資料として残された。
- ・祖父母や家庭と学校との結び付きが深くなった。

8 今後の課題

- (1) 生活科としては、知識より活動が先に来ることが望ましい。これからも具体的な活動や体験を通じた学習を重視して行きたい。
- (2) この先も発達段階を追って中味を充実させ、中・高学年の社会科の郷土学習や歴史学習の基礎となるような指導内容・方法を検討していきたい。

検証事例・その2

身近な素材を活用し、日常の自然現象に関心をもたせる工夫

中学校 第1学年 理科

1 単元名 「光と音の世界」

小単元「光はどのような進み方をするか」

2 小単元の目標

- (1) 光や、光の反射・屈折などの現象に関心をもち、自ら進んで調べようとする。(自然事象への関心・意欲。態度)
- (2) 光が直進することに気付き、光の反射・屈折の規則性や、それによって起きる現象を考察できる。(科学的な思考)
- (3) 光の反射、屈折、全反射の実験を行い、結果をまとめることができる。(観察・実験の技能・表現)
- (4) 身の回りの事物・現象と関連付けて、光の反射・屈折を説明できる。(自然事象についての知識・表現)

3 小単元設定の理由

普段気にしていない太陽光線はどのような進み方をしているのだろうか。またなぜ、物を見ることができるのだろうかと真剣に考えたことはないであろう。見えるため、見るためには太陽光線(光)が必要である。それは、光が直進しているからである。このことを理解させるために身近な素材である鏡をつかって実験をすることで解明させたい。この実験を通して日常生活で体験している自然現象に興味をもたせ、意欲的に学ぶ力を育てたい。

4 研究主題との関連

暗くなると物が見えなくなり、ものを見るために電気(光)をつける。また、自分の顔や姿を見るために使う鏡、両方とも普段気にも留めず体験していることである。何気なく体験している自然現象に気付かせ、日常生活で使用(体験)している道具や機械と自然現象との関連に意欲をもって関心をもたせる。そして、それらの関係を自ら探究して解明させたい。

5 地域の様子と生徒の実態

(1) 地域の実態

本校は、青梅線河辺駅の北東約2キロの霞台地の一角にある。青梅市内で10番目の最も新しい中学校である。かつては、畑が散在していたが、現在はほとんど住宅地と変わり、約9割が他地区からの転入者である。近年マンションの建築が増え、大手スーパーが進出してきている。

(2) 生徒の実態

2つの小学校から入学してくる。全般に素直で明るい。とりわけ気持ちの良いあいさつが評判である。校則がよく守られ、落ち着いた整然とした環境の中で毎日の教育活動が営まれている。合唱祭や運動会などの学校行事には、どの生徒も積極的に取り組む。課外活動にも精力的に参加している。しかし、学力面において男女に開きがあり、男子に基本的学習習慣が身に付いていない生徒が多い。

6 指導計画（3時間）

- (1) 光とかげから、物体がみえること光の直進性を考えさせる…………… 1時間
- (2) 光はどのような進み方をするか
光の反射の規則性を調べよう（実験）…………… 1時間（本時）
- (3) 透明な物体を通る光の進み方
透明な物体を通る光の道筋を調べよう（実験）…………… 1時間

7 本時の学習

(1) 本時の目標

- ① 光が鏡に当たって反射する場合、反射のし方に何かきまりがあるか話し合う。
- ② 光源を用いて光を鏡に当て、入射角と反射角とが等しい角度であることを実験によって調べる。

(2) 本時の展開

	学習活動と内容	教師の支援	資料・その他
導入 6分	・前時の鏡遊びから光の進み方を予想する。	・前時の学習内容を思い起せるように鏡遊びから光の進み方を予想させる。	・実験プリント配付
展開 34分	・実験の目標、準備、方法を確認する。 ・2人1組になって実験をし、入射光と反射光の道筋を記録する。 ・的の位置を変えてそれぞれが実験する。 ・実験結果をプリントにまとめる。 ・考察をまとめる。 ・実験器具の後片付けをする。	・黒板に準備するものを書いておく。実験終了時間を板書しておく。 ・準備用品保管場所の説明をする。 ・方法の説明をする。 ・実験方法等についての質問を受ける。 ・実験中の机間指導をする。 ・実験終了の指示をする。	・光源装置 ・鏡（アクリル樹脂ミラーか平面鏡） ・記録紙（升目の入った板目紙） ・的（消しゴム、鉛筆何でもよい） ・筆記具（細いマジック） ・分度器 ・懐中電灯（光の出るもの）
まとめ 10分	・光の進み方について考えをまとめ班ごとに発表する。（黒板に実験結果の紙を貼る。） ・他の班の結果を見て、自分の班と比較する。 ・光の反射の規則性を知る。	・黒板に各班ごとの結果が示せるように模造紙を貼る。 ・光の反射の法則を説明する。	・実験プリント回収

(3) 評価

- ① 物体が見えることと光の直進性が理解できたか。(科学的な思考)
- ② 鏡に光を当て、入射角と反射角が等しいことが実験を通して理解できたか。(観察・実験の技能・表現)
- ③ 光の反射の法則を説明できたか。(自然事象についての知識・理解)

(4) 授業の考察

- ① 2人1組で実験をさせたことにより、全生徒が意欲的に取り組んでいた。
- ② 鏡を置くところに線を引いたのは丁寧すぎた。
- ③ 生徒は、入射角＝反射角というのは知っていたが上手に言葉に表すことができなかった。
- ④ 他の班の結果を黒板に貼らせたことにより、自分たちの実験方法と結果を見較べる事ができ、光の反射の法則を理解することができた。
- ⑤ 身近な素材の懐中電灯と鏡を使ったことにより、光の直進性に気づき自然事象への関心が高まった。
- ⑥ 太陽光線を利用して光の反射の法則を解明しようとする班が出るなど自ら学ぼうとする力が高まった。

8 今後の課題

- (1) 光がどのように進むのか生徒側から考えさせ、生徒に予想させる必要がある。
- (2) 光を発する身近な素材にはどのようなものがあるか事前に調べさせ、表にまとめさせたい。
- (3) 大きな鏡等を使用して実験する生徒もいるので1つの班の人数を2～4人となるような柔軟性が必要である。
- (4) 光源装置を使用し、実験方法を演示することはやめ、生徒自身で方法を考えさせていきたい。

検証事例・その3

地域素材を活用し、児童一人一人が学習課題をもつための指導の工夫

小学校 第5学年 社会

1 小単元名 「檜原村の産業」～鉱業～

2 小単元の目標

- (1) 檜原村の産業（鉱業）について、学習課題をもち意欲的に調べる。
- (2) 檜原村の産業（鉱業）が多くの関連産業と関わっていることに気付く。
- (3) 調べたことをもとに、これからの檜原村について考えを深める。

3 単元設定理由

5年生の社会科は、産業学習が中心である。本小単元はその中の『工業』の導入単元にあたる。檜原村の砕石場で採られた石が道路やビルなどの工業製品になる工程を予想し調べる活動の中で、人々の手や機械を使って原料を加工し製品をつくる産業が工業であるということや、またそれには多くの関連産業が関わっていることに気付かせたい。そしてこの後の学習では私たちの生活がそれらの工業製品によって豊かになっていると同時に、また一方では、公害などの環境問題を生み出していることに気づき、そのことが檜原村にもあてはまることを理解し、工業の発達と自然環境の保護、これからの檜原村について考えを深めさせたい。

4 研究主題との関連

児童が課題を持つ工夫として、まず、児童にとって身近な地域素材である砕石場をとりあげることにした。砕石場は3年時に見学した経験があり、ある程度の予備知識があり、調べようという意欲をもつきっかけとして良いのではないかと考えた。次に砕石場でとれた石が様々な工程を経て工業製品となることを、2つの段階（石自体の変化・それに関わる仕事）に分けて予想することにより、一部ではあるが工業の全体像をおおまかにとらえることができるのではないかと考えた。そして各工程ごとに疑問点をだすことにより、自分の調べていきたいことを明確にし、それらを整理して自分の学習課題としてもたせたいと考えた。

5 地域の様子と児童の実態

本校（数馬分校）は東京都の最西、標高686mの山間部にあり、最寄りの駅からバスで1時間程の所にある。かつて檜原村には小学校が8校あったが、人口の減少に伴い統廃合が行われ、旧数馬小学校だけが数馬分校として残った。現在、全校児童19名。豊かな自然に恵まれている反面、気象的には厳しく、特に冬は積雪のため交通遮断や臨時休校の措置をとることもある。またストーブは年間を通して設置され7・8月以外は使用できるようになっている。保護者や地域の人々は学校に対してとても協力的である。

本学年の児童は、素直で明るく、授業中も良く発言する。しかし、社会科の学習については、学習課題を設定し調べたいという意欲をもつことができても、どのように調べればよいのかが分からず、主体的な活動につながらない場合が多い。本単元では見学活動が可能な地域素材を活用し、さらにFAXや電話などで調べる活動を取り入れることで、学習課題を追求する場を設定し、自ら進んで学習する楽しさを味わって欲しいと思っている。

6 指導計画 (8時間扱い)

- (1) 砕石の生産から工業製品になるまでの工程を予想し、学習課題をもつ。・1時間(本時)
- (2) 学習課題について、調べるめあてや方法、まとめ方を考える。・・・1時間
- (3) 学習課題を追求し、分かったことをまとめる。・・・5時間
- (4) まとめたものをお互いに評価する。・・・1時間

7 本時の指導

(1) 本時の目標

檜原村の砕石場で採れる石が工業製品(道路、ビル等)になるまでの工程を予想し、その工程や関わる仕事について学習課題をもつ。

(2) 本時の展開

	学習活動と内容	指導上の留意点	資料等 ☆教師 ★児童
5分	・ 鉱業(砕石)が檜原村の産業のひとつであることを確認する。	・ 3年時の学習を想起させる。	☆ 地図黒板
20分	・ 檜原村の砕石場で採れた石が工業製品になるまでの工程を予想し、図に表す。	・ 工程図を作る時に参考になるような板書をする。 ・ 予想が困難な児童に助言する。	☆★ 砕石場で採れた石 ☆ 板書カード ★ 工程図作成用の画用紙 ★ 付箋紙
20分	・ 調べたいことを、作成した予想工程図に書きこむ。 ・ 次時の予告。	・ 各工程ごとに知りたいこと、調べたいこと(分からないこと)を書き込むようにさせる。	

(3) 本時の評価

檜原村の砕石場で採れる石が工業製品(道路、ビル等)になるまでの工程を予想し、その工程や関わる仕事について学習課題をもつことができたか。

(4) 授業の考察

- ① 身近な教材を扱ったことで、児童が教材に触れて集中していた。また、工程を予想する活動を取り入れたことで、自分が知りたいことや疑問点を明らかにすることができた。
- ② 教材に触れて集中し、疑問や課題はもてたが、発問が適切でなかったため思考や作業があまり進まなかった。
- ③ 活発に意見がでていた。発表させるだけでなく、お互いの意見を交換する場を設定すると、

表現力や学習意欲も高まるのではないか。

- ④ 児童からしきりに出ていた疑問（生コンって何？）をその場でとりあげるべきだった。
- ⑤ 調べたことをどのように活用するのかを考えさせたことで、まとめ方に工夫が見られた。
- ⑥ 調べる段階では、工場や会社の方が児童一人一人の疑問に丁寧に答えてくださった。この体験は児童の学習意欲を大いに高めた。

8 今後の課題

- (1) 児童相互の意見交換や話し合い活動を活発にし、自らの考えを深めたり、友人の意見や学習活動を参考にして視野を広げていくなどの学習活動を行っていく必要がある。
- (2) 個に応じた、一人一人が学習課題を追求できるような場の設定や資料の精選を行う必要がある。
- (3) 主体的に学習を進めて行くことのできる児童を育成するために、多様な学習活動や様々な経験をさせる必要がある。

< 児童作品 > (例)

石が石 かべにならまで

もくじ

- 1 石が石場の人の仕事
- 2 石が石はどのようか所アかまてし
- 3 新石製生コンクリート式かまてし
(わしたちのしつもんこてあてたました)
- 4 はたらいている人のはたきぶり
- 5 プリント
- 6 さいせきがかべにならまで
- 7 しゃしん
- 8 さいせきのさいせき
- 9 さいせき石のかわり方
10 しらべ

砕石場の仕事

石が石を山から取ってくる。
石が石をきいてくたく。
トラップで石が石をばらばら。

```

graph TD
    A[石が石を山から取ってくる] --> B[石が石をきいてくたく]
    B --> C[トラップで石が石をばらばら]
    
```

石が石を山から取ってくる
石が石をきいてくたく
トラップで石が石をばらばら

石が石を山から取ってくる
石が石をきいてくたく
トラップで石が石をばらばら

石が石を山から取ってくる
石が石をきいてくたく
トラップで石が石をばらばら

検証事例・その4

作問による課題学習を通して、問題解決の能力を高める指導の工夫

中学校 第2学年 数学

1 単元名 「課題学習」

小単元名 「平面図形の性質を使った問題作り」

2 小単元の目標

- (1) 多様な方法で課題を解決する過程を通して、既習事項を応用して活用できるようにする。
- (2) 発展的な問題を作ることにより、数学的な見方や考え方の育成を図り、さらには、問題作りに対する興味・関心を高める。
- (3) 生徒の自由な発想を大切に、主体的な学習の場を与える。

3 小単元設定の理由

2年生では、論証の初期の指導が行われるが、図形の証明は生徒にとって理解しにくい分野である。既習事項の基本的性質そのものは理解していても、それを活用する場面になると、今一步深まっていけない生徒が多い。説明を中心とした教師主導の授業が多く、生徒が問題を自分のものとして受けとめられないことが要因の一つであろう。

そこで、教科書等身近なものから課題を選定し、生徒に問題を作る場面を体験させることを考えた。生徒自らが問題を作り、自ら解決しようとする主体的な学習活動をさせる中で、成就感を味わい、発展的・応用的に思考する態度、さらには、問題解決の能力も養われるであろうと考え、小単元を設定した。

4 研究主題との関連

課題学習における課題選定と実施時期は、生徒の実態に応じて行うことが大切である。初期の論証指導が始まるこの時期での実施は、多様な数学的な見方や考え方を育むのに効果的であると考え。そして、思考実験が中心となるこの問題作りを、「体験的活動」として位置づけた。問題作りを通して、生徒一人一人に、ものごとを考えることの楽しさを体得させ、さらには、問題解決の能力を高めていきたい。こうして、課題学習に問題作りを取り入れることにより、課題学習のねらいでもある生徒の主体的な学習が促進され、このことが、研究主題の「自ら学ぶ力」につながっていくものと考え。

5 地域の様子と生徒の実態

三宅島は、東京から南へ180kmほど離れた、伊豆諸島では3番目に大きい島である。自然環境に恵まれた島で、野鳥の種類も多くバードアイランドとも呼ばれている。ただ、日本でも有数の噴火の激しい島でもあり、昭和58年の噴火は、記憶に新しい。阿古地区では、約400戸の民家が溶岩に埋没するなど、壊滅的な被害を受けた。保護者・地域の人々は、教育に対して関心が高く、学校行事やPTA活動にも大変協力的である。

本校は、全校生徒30名で、島内の3つの中学校の中では一番小規模である。生徒は、恵まれた自然環境の中で育ち、純朴で感受性に富んでいる。しかし、ものごとに対して自ら意欲的に取り組もうとする態度や、少人数化が進む中で、集団の中での経験を通して育まれる社会性が十分に育ってこないということが課題となっている。

6 指導計画（2時間）・・・単元「平行と合同（16時間）」終了後

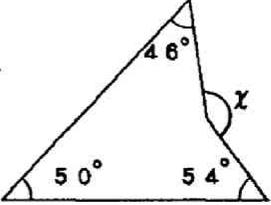
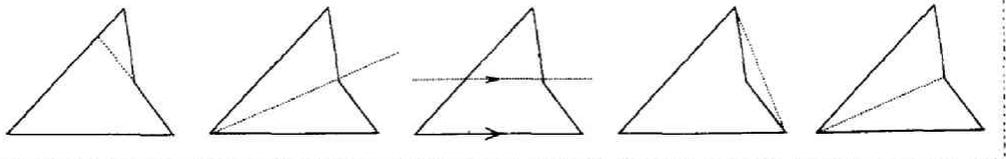
- (1) 原題の解決から、問題作りを行う。・・・1時間（本時）
- (2) 全員の作った問題を吟味し、解く。・・・1時間

7 本時の指導

(1) 本時の目標

- ① 多様な考え方で証明し、既習事項の理解をさらに深める。
- ② 問題を発展させることにより数学に対する興味・関心を高め、主体的学習態度を養う。
- ③ 他人の考えや発表を聞き、数学の持つよさを感じ取る。

(2) 本時の展開

	学習活動と内容	教師の支援	資料・その他
導 入 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題提示 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>課題1：右の図で、$\angle x$の大きさを求めよう。</p> <p>課題2：この問題の条件を変更したり、図を変形させて新しい問題を作ってみよう。</p> <p>問題を解くのに用いた性質を利用してよい。</p> </div>		<ul style="list-style-type: none"> ・実物投影機を使用 
展 開 40 分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題1（原題）を各班で解決する。 ・各班で解き方を発表し、質問を受ける。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>予想できる回答例</p>  </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・補助線の多様なひき方を助言する。 ・$\angle x = 46^\circ + 50^\circ + 54^\circ$を確認する。 ・使った定理を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント配布 ・小黒板
分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題2（作問）を各自で行う。 ・問題作りの見通しを持つ。（条件変更，補助線，図の変形等） ・作った問題の一部を解く。 ・再び，問題を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題作りの見通しはできるだけ指示せず，自由に作らせる。 ・原題との違いを確認する。 ・問題のできない生徒に助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題作成用紙を配布 ・実物投影機

ま と め 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員の問題を紹介する。 ・ 問題作成用紙を回収する。 ・ 自己評価カードに記入する。 ・ 次時の予告 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実物投影機 ・ 自己評価カード
-----------------------	---	--

(3) 評価

- ① 既習事項を利用し、多様な考え方で証明できたか。
(数学的な考え方、図形についての知識・理解)
- ② 問題作りに対して、興味を持ち、主体的に参加することができたか。
(関心・意欲、数学的な表現・処理)
- ③ 他人の考えを聞き、理解しようとする態度が養えたか。(態度)

(4) 授業の考察

- ① 自己評価では、ほとんどの生徒が進んで授業に参加していた。問題作りについては、難しかったようであるが、逆に、かえってそれが新鮮で、教科書以外の自分の問題を作れるので楽しいという意見もあった。
- ② 理解の度合いの意思表示が明確であり、また、全員の作った問題を紹介するなど、少人数というへき地小規模校の利点がよく生かされていた。
- ③ 問題として未完成のものが多かった。もう少し時間をかければ完成したであろうし、さらに、多様な問題ができたかもしれない。
- ④ 課題1は、補助線のひき方により既習事項の確認ができ、また、多様な見方や考え方を身に付ける意味でも、導入問題としてよかった。
- ⑤ 課題2の問題作りにおいて、条件変更など質問の意図がわからず、最終的にどういう問題を作ってよいか迷っている生徒が多かった。
- ⑥ 課題1の図を変形させて、最後には、星形五角形の問題ができた。また、星形五角形の先端の角について、新たに疑問が生まれ、問題から問題への発展性があった。

8 今後の課題

- (1) 問題作りでは、原題によって、生徒の考える方向性が変わってくる。生徒が作るであろう問題を教師側で事前に考え、原題を工夫していかなければならない。
- (2) 問題作りでは、自力解決と教師の指導との場面を区別しながら、考える時間を十分に与えなければならない。そこで、日頃の授業と関連させながら、課題学習の時間をどのように確保していくか検討する必要がある。
- (3) グループ学習から個別学習へと、授業の中に動きがあった。ただ、グループ学習の時、あまり活発な話し合いがなされなかった。少人数の中でのグループ学習の在り方など、学習形態を考えなければならない。

検証事例・その5

スピーチを通して、生徒一人一人が自ら学ぶ力を育てる指導の工夫 中学校 全学年 英語

1 題材 スピーチ

2 題材の目標

- (1) 自分自身が最も興味・関心を抱くことについて考えをまとめ、その発表を通して自分自身の考えを人の前で明らかにする。
- (2) 相手の発表を聞くことで、お互いの個性を発見し、知ることの喜びを感じる。
- (3) 質問すること、答えることを通してコミュニケーション能力を引き出し、育てていく。

3 題材設定の理由

月1回の外国人英語指導助手との授業は貴重な人(外国人)との出会いの機会である。スピーチを通じて、自分を表現し、同時に相手をも分かっているという喜びを体験できる場でもある。少人数の学校の特徴を生かし、学年を越えた授業を実施することで、一人一人の良さを認め合い、共に学ぶ学習の場に育てていきたい。そうすることでより豊かな学習の基礎が築かれ、自ら学ぶ力が徐々に育っていくのではないかと考え、本題材を設定した。

4 研究主題との関連

学年の枠を越えた学習の場で、お互いの考えを発表する。それを聞いて「尋ねる」「答える」ことが体験的学習活動のひとつであると考えた。下限を超える英語の時間をコミュニケーション重視の学習時間として位置付け、教科書の枠を越え、自由な発想でより身近な生活について考えることにした。力が及ばない所は教師が援助することにし、できたものをお互いに発表し合い、質問したり、答えることで、コミュニケーション能力を身に付けていくなれば、生徒自身が英語に対する興味・関心や学ぶ意欲を育てていくことができると考えた。

5 地域の様子と生徒の実態

標高550mの山間に位置する本校の自然環境は厳しく、交通が不便なため、卒業後は親元を離れることになる。観光地に位置しているため日曜日も働いている保護者が多いが学校には大変協力的である。生徒達は純朴、素直であり清掃活動等自ら進んで行う。又ボランティア活動が盛んでその活動から生き方について深く考える生徒も現れてきている。

6 指導計画

- (1) 各学年授業(4月) (2) 各学年授業(5月)
- (3) 合同授業(6月)スピーチ第1回
- (4) 各学年授業(7月) (5) 合同授業(夏休み課題)
- (6) 合同授業(10月)スピーチ第2回
- (7) 合同授業(11月)スピーチ原稿作成
- (8) 合同授業(12月)スピーチ第3回(本時)
- (9) 合同授業(1月～3月)文集作り

7 本時の指導

(1) 本時の目標

- ① これまで（6月，10月）のスピーチ経験を生かして，より発展したスピーチ発表を目指す。（原稿を暗唱するのが原則だが，メモを見るのは許容範囲とする）
- ② 外国人英語指導助手の質問に答えるだけでなく，他の人の発表を聞いて質問をする。
- ③ 各々の発表者の評価を行い，お互いに交換し合い，今後の参考資料とする。

(2) 各学年の指導のねらいと手だて

第1学年…日常生活の簡単なことについて理解することをねらいとし，分からないところがあった場合，積極的に助言を与え，授業が苦痛にならないように配慮する。

第2・3学年…能力差を配慮しながら，個人の力に合ったコミュニケーション活動が展開されるように配慮すると同時に，高い目標に挑戦する機会をも与えたい。

※ 個人差，学年差を考慮し，理解の手だてとして英文原稿とその日本語訳を配布する。

(3) 本時の展開

	学習活動と内容	J E Tの支援	A E Tの支援	資料・留意点
導入 5分	・挨拶 スピーチのねらいの確認 発表順番の決定をする。	・挨拶 ・理解できるように英語，日本語を使って確認する。	・挨拶 ・英語で要領，ポイントを説明する。	スピーチ原稿 評価表
発表 表	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="text-align: center;">(発表者)</div> <div style="text-align: center;">(視聴者)</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px; text-align: center;">スピーチ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; text-align: center;">聴視</div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">「私の今，考えていること」</div> <div style="display: flex; justify-content: center; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; text-align: center;">質問</div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">(教師の支援)</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; text-align: center;">応答</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px; text-align: center;">内容理解</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・元気よく，堂々と発表できるように励まします。 ・A E Tの確認について質問者を援助する。 ・相互に協力して発表者応答を支援する。 ・必要に応じて応答内容を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で進行する。 ・進行役として質問した生徒の意図を英語で確認する。 ・発表者が応答できたことを認め，ほめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表内容から予想される質問の構文・カードを用意する。 ・質問，応答に対する支援はA E Tの英語を主とするが，J E Tの判断で日本語でも解説し生徒が自信を失うことがないように配慮する。

40分	<p>A E Tの質問</p> <p>(教師の支援)</p> <p>応答</p> <p>内容理解</p> <p>自己評価</p> <p>評価表</p> <p>1人4分×10人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表者の能力に応じた質問をする。 ・相互に協力して発表者応答を支援する。 ・必要に応じて応答内容を生徒に伝える。 ・発表者が応答できたことを認め、ほめる。 ・評価活動開始の指示をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価表は、簡単に短時間で記入できるものを用意する。
	<p>ま</p> <p>と</p> <p>め</p> <p>5</p> <p>分</p>	<p>スピーチ発表の反省と、今後の課題を話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・良かった点の確認と、次回の目標について提示する。 ☆J E TとA E Tの評価が異ならないように、互いに確認した上で生徒に伝える。

(4) 評価

- ① 練習を重ねたうえで自分自身で納得のいく発表ができたか。(表現・意欲)
- ② 相手の考えを聞いて、それを理解することができたか。(関心・態度、理解)
- ③ 質問することができたか、又答えることができたか。
- ④ 授業に積極的に参加することができたか。

(5) 授業の考察

- ① 6, 10月の発表に比べて明らかに進歩・向上がみられた。
- ② 予定通り進むことができなかつたが臨場感のあるコミュニケーション活動を設定できた。
- ③ 自分自身を解放するというレベルには程遠い結果となったが、繰り返しスピーチを重ねていけば次第に自信がついていくという予想を持つことができた。
- ④ 各自の良い点を評価したことは良かった。次回へのステップになると思われる。

8 今後の課題

- (1) 生活に根ざした表現を身に付ける指導と同時に、その発表を定期的に行う。
- (2) 基礎学力の定着が課題になっている生徒もいるため、力の差がはっきりと出ている場面が見られた。少人数の利点を生かして、お互いに助け合いながら、自ら学ぶ力を育てる。
- (3) 生徒達自身にはっきりと方向性が見えてくるように、全学年の指導の体系化を図る。

V 研究のまとめと今後の課題

本研究部会では、地域の特性、児童・生徒の実態等について共通理解を図った上で、へき地教育研究の主題を「体験的な活動を生かし、児童・生徒一人一人が自ら学ぶ力を育てる指導の工夫」とした。そこで、研究主題に迫るために次の2つの仮説を設定した。

<仮説1>地域素材や身近な素材を活用し、体験的な学習活動を展開することにより、児童・生徒の興味・関心も増し、自ら進んで学ぼうとする意欲が高まるであろう。

<仮説2>主体的に課題に取り組む学習活動を工夫し、児童・生徒が自ら課題を解決することにより、成就感が得られ、自ら学ぶ力が養われるであろう。

上記仮説に基づいて、検証授業を行った。その結果、次の成果を得ることができた。

1 研究の成果について

- (1) 地域素材を活用し、身近な人に聞いたり、資料を調べたりする体験的な活動を通して、一人一人が課題をもって楽しんで学習に取り組むことができた。(検証事例1・小2生活)
- (2) 身近な素材を活用し、2人1組の小グループによる観察、実験、発表を通して、生徒が意欲的に学習に取り組み、自然現象の法則を理解することができた。(検証事例2・中1理科)
- (3) 地域素材に直接触れることによって、学習に取り組む集中力が高まった。学習課題をもち、調べる活動を通して、学ぶ楽しさを味わうことができた。(検証事例3・小5社会)
- (4) 作問による課題学習を通して、興味・関心を高め、問題解決の能力を高めることができた。一斉授業において、グループ学習、個別学習の授業形態を組み合わせることは、数学的な多様な見方・考え方を育む上で効果があった。(検証事例4・中2数学)
- (5) 学年の枠を越えたスピーチ活動を通して、生徒が自ら学ぶ力を育て、互いに教え合い、高め合えた。外国人指導助手と担任との行き届いた指導で英語に対する理解が深まった。(検証事例5・中全英語)

研究の結果、検証事例を通して分かるように、児童・生徒は「体験的な学習」「問題解決的な学習」を展開することにより、自ら学ぶ態度、能力を培うことができた。

2 今後の課題について

- (1) 地域素材や身近な素材を、より効果的に体験的な学習に取り入れる必要がある。
- (2) 一人一人が学習課題を追求できるような場や資料の精選を行う必要がある。
- (3) 教科・領域を通じて、地域素材や身近な素材を活用した問題解決的な学習を意図的・計画的に指導する必要がある。
- (4) 身に付けた学ぶ力を定着させるために学習過程や学習形態を工夫し、学ぶ力をより確かに高められるようにする必要がある。

VI 参考文献

文 献 名	編 著 者	発行年	発 行 所
学び方・学ばせ方の心理	北尾倫彦著	昭和55年	創元社
わかる授業の心理学	北尾倫彦・速水敏彦著	昭和61年	有斐閣
自己教育力を考える	北尾倫彦編集	昭和62年	図書文化
自己教育力育成の実践事例集	北尾倫彦著	平成2年	図書文化
学習指導の心理学	北尾倫彦著	平成3年	有斐閣
自己教育の心理学	北尾倫彦著	平成6年	有斐閣
学習と教育	無藤隆・久保ゆかり著	平成2年	新曜社
教室でどう教えるかどう	吉田甫・栗山和広編著	平成3年	北大路書房
学ぶかこどもの学習意欲を たかめる	塩見邦雄著	平成6年	北大路書房
体験学習の進め方（小学校）	加藤幸次編	昭和59年	教育出版
課題に挑戦する体験学習の 授業づくり	佐島群巳・和田芳信編	平成3年	ぎょうせい
体験学習を創る	田村鐘次郎編	平成4年	東洋館出版社
体験が生きる教室	無藤隆著	平成6年	金子書房
自己教育力読本	教育開発研究所編集室	昭和62年	教育開発研究所
へき地小規模学校読本	教育開発研究所編集室	昭和62年	教育開発研究所
地域素材の教材化読本	教育開発研究所編集室	平成4年	教育開発研究所
児童・生徒の個性を生かす 学校教育の推進（報告書）	東京都多摩教育事務所		多摩教育事務所
へき地小規模校ハンドブック	東京都多摩教育事務所		多摩教育事務所
教育じほう（各号）	東京都立教育研究所		都新教育研究会
たくましく生きる力を育てる 教育活動の工夫・改善	東京都立多摩教育研究所	平成6年	多摩教育研究所
小学校学習指導要領	文部省	平成元年	大蔵省印刷局
中学校学習指導要領	文部省	平成元年	大蔵省印刷局
小・中学校指導書	文部省	平成元年	各社
小・中学校指導資料	文部省		